慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	李新・孫思白 主編 『民国人物伝』 第一巻
Sub Title	
Author	山田, 辰雄(Yamada, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1979
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.52, No.12 (1979. 12) ,p.116- 120
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19791215-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

李新 孫思白 主編『民国人物伝』第一巻

一

本書は、一九七八年に中国で出版された中華民国期の人物伝である。ここでいう中華民国期とは、一九〇五年から一九四九年にいたる時期を意味する。それはさらに、民国創立期（一九〇五～一九一二年）、北洋軍閥政府の反動統治時期（一九一二～一九二七年）、国民党政府の反動統治時期（一九二七～一九四九年）に分かれる。本書は、この時期に活躍した六五人の人物の伝記を収録している。そこでは、各人物の執筆者の名前が明示されている。

本書は、その内容とともに、それが出版されたという事実によって注目される。つまり、本書が今日の中国で出版された背後では、これまで軽視されてきた民国史の研究が進行しつつあるということである。そこで私は、中国における民国史研究の計画を紹介し、その意義を論じるなかで、本書の内容を検討していこうと思う。

二

「前言」によると、すでに一九七二年八月中国社会科学院近代史研究所は中華民国史編纂の任務をひき受け、執筆の計画を作成した。その計画は、中華民国史と三種類の資料（中華民国大事記、中華民国人物誌、中華民国の政治・経済・文化の特定の問題にかんする資料）から構成されていた。さらに中華民国人物誌は、人物伝、人名辞典、人物表からなる。本書は、中華民国人物誌の一部をなすものである。

一九七八年九月という日付を附した（この日付自体は、いかなる理由によるかはわからないが、矛盾したものである。なぜなら、本書の印刷・出版が一九七八年八月となっているからである）『民国人物伝』の「選録草案」は、本書に収録すべき人物の選択基準を以下の一七項目にわたって列挙している。（一）清末（一九〇五年以後）反動統治階級のなかの重要人物。（二）一九〇五年以後の重要なブルジョア革命家、同盟会の革命活動のなかで犠牲になった著名な烈士。（三）一九〇五年以後の、人民が自ら行なった反帝・反清闘争のなかの著名な指導者と烈士。（四）一九〇五年以後の改良派の重要人物。（五）中華民国成立後の各主要党派、政治団体の指導者と主要な活動分子。（六）歴代の「国会」と「国会」に相当する各種の代表会議（都督府代表連合会、蔣介石の国民代表大会など）の議長、副議長、重要な議員。（七）北洋軍閥政府首脳と総理全員、および、政府各部部長と次長、都督、都統、省長のなかの重要人物。（八）護国、護法、国民政府時期の南方の歴代政府の首脳と重要な部長、軍長、師団長。（九）北洋軍閥統治時期の民間闘争中の著名な人物。（十）国民党政府の首脳全員。重要な院長、部長、省長、市長。軍人は軍大な政治事件に密接に関与した集団軍司令、軍長、師団長等に限られる。特務機関の主要

な首領。（十一）蔣介石国民党の反対派政府の重要人物。（十二）偽「満洲国」など六つの傀儡政権の悪名高い漢奸。（十三）中国で直接侵略活動を行なつた重要な帝国主義分子。主要な「外国顧問」。（十四）金融界、工商業界の有名な資本家、およびその主要な代理人。（十五）文化、教育、科学技術、医薬衛生等各界の知名人士。（十六）少数民族の重要人物、華僑の知名人士、宗教界の有名人士など。（十七）秘密結社の指導者、土匪や黄色労働組合の首領等がそれである。

以上の項目を一瞥してわかるように、本計画が包含しようとしている人物は非常に広範囲にわたつている。人物伝は約一〇〇〇名、人名辞典は約四〇〇〇名の人物の収録を予定している。問題は、本書の編者たちが民国史研究にいかなる意義を見出し、それが本書のなかにいかにあらわれているかということである。さらには、編者の立場を離れて、民国史の研究が中国現代政治史の研究全体に対していかなる意味をもつかということも検討されなくてはならないであろう。本書の編者の一人である孫思白氏が『教学与研究』一九七九年第三号に「関与編写≪中華民国史≫工作的進展情況与問題」と題する論文を発表しているので、私はこの論文を参照しつつ、以上の問題を論じていこうと思う。

三

なぜ中華民国史を研究するのか。孫思白氏によると、民国史は「最後の搾取階級政権の『時代史』（断代史）」であり、「政治上あるいは政権上から着目したものである。」「『政治は経済の集中的表現である』から、政治の面から一時代の興亡を研究するという理由からも、一時代の文献を整理・保存するという観点からも、その研究は理にかなつたものである。」かかる理由から、孫氏は今までの民国史研究の空白を埋める必要性を説いているのである。ただし著者は、なぜ民国史の研究が今まで軽視されてきたかという問題には答えていない。

一九〇五～一九四九年の時期を扱う民国史は一九一九～一九四九年の時期を扱う従来の中国現代（革命）史あるいは新民主主義革命史と時代区分の点において異なる。しかも孫氏も指摘するように、民国史の主要な対象は「人民」ではなく、「統治階級」である。したがつて、民国史のこのような性格と従来の中国現代史との関係が解明されなくてはならないのである。

本書もこの点を意識している。「前言」は、民国史の執筆にあたつては、「マルクス主義、レーニン主義、毛沢東思想を指導方針とすることを堅持しなければならず、決して中国封建時代の伝統的歴史編纂の方法を踏襲してはならない」と述べている。この点にかんして、孫思白氏の言葉を借りれば、中国歴代の歴史編纂は「統治階級を主体としていた。」しかるに、民国史の執筆は「人民の利益から出発し、人民の立場に立つて統治階級の活動を評価しなくてはならない」のである。かくして、マルクス・レーニン主義・毛沢東思想、あるいは人民の立場に立つ限り、民国史は、時代区分において新民主主義革命史と異なり、叙述の主要な対象が民国期の統治階級であるとしても正当化される。したがつて、ここでは人民の立場と

人民に反対する立場、あるいは革命と反革命との区別が原則的に承認される。しかし、このことは民国期の統治階級を一律に反動的・反革命的と規定することを意味しない。例えば孫氏は、辛亥革命直後の南京臨時政府時期や広州国民政府時期を反動的ではないと規定している。すなわち、そこを貫くのは、民国史に登場する人物や事件が人民＝中国共産党の立場にとつて有益かどうかという視角である。しかし、「前言」で示唆されているように、本書ではできるだけ事実の検証を経た叙述が求められており、過度な評価は抑制されているのである。

このように見てくると、本書ならびに孫思白氏の論文の関心は、人民の立場あるいは中共が現代史に対して従来とつてきた立場を、いかに矛盾なく民国史に適用するか、ということにあることがわかる。この民国史編纂計画に欠落している視角は、民国史の研究が従来の現代（革命）史あるいは新民主主義革命史にどのような影響を与えるかということである。孫氏は、人民の立場に立つ限り民国史と革命史はその分析対象を異にするにすぎず、両者は相互補完的関係にあると主張している。しかし民国史それ自体の研究は、人民の立場に立つて書かれたという革命史の修正ないしは調整を迫る、というのが私の考えである。例えば、民国史の研究において、中共が対決しなければならなかつた反革命の力が解明されたとする。そのことは、中共と反革命勢力との客観的力関係を明らかにし、中共の立場をその当時の政治情況のなかで相対的に位置づけることになる。したがつて、それはまた、革命史における中共の政策の進歩的性格とともに、力関係の点からなぜその政策を実行しえなかつたかという限界、その限界を前提とした場合の政策それ自体の妥当性にも問題を投げかける可能性をもつているのである。また民国史は、中共とその他の政治勢力との相互作用からなり立つているという側面を有する。したがつて、民国史の研究は、中共の政策をそれ自体としてではなく、その他の政治勢力の政策との対比のなかで評価することを可能にするであろう。そこでつぎに、本書のもつ特徴を若干の具体的例にあたりながら検討していくことにしよう。

四

本書の第一のかつ最大の特徴は、人民＝中共の立場に立つて、収録された人物を評価し、革命と反革命とを截然と区別していることである。孫文について執筆している尚明軒氏は、中国同盟会が「中国最初のブルジョア革命政党」であり、そこから生れてきた三民主義が「一つの比較的整つた民主主義革命の政綱であり、旧民主主義革命時期の歴史的特徴を反映している」と評価しているそこでは、同盟会の立場と保皇党の立場との対立が革命対反革命の図式で理解される。さらに著者は、毛沢東の立場を踏襲して国民党一全大会で表明された三民主義を、新民主主義革命段階における連ソ・連共・労農扶助の三民主義であると解釈する。結局孫文は、中国の「ブルジョア民主主義革命の先駆者、偉大な民主主義革命家、中華民国の創始者」であつた。このようにして、孫文はブルジョア民主主義革命の枠内でその革命性が高く評価される。

民国初期のいま一人の指導者である袁世凱に対する評価は孫文と対照的である。李宗一氏がその執筆にあたつている。袁世凱は「北洋軍閥反動集団」の首領であり、戊戌の変法において変法派を裏切り、義和団の運動を弾圧した。彼は辛亥革命勃発後「大地主大買弁階級専政の北洋軍閥政府」を樹立し、以後中国の「独裁専制的統一」を目指した「大野心家、大陰謀家」であつた。

本書の著者たちは、蔣介石ならびに彼の指導下の国民党に対しても厳しい評価を与えている。孫文の項目のところで著者の尚明軒氏は、黄埔軍官学校の設立と発展のなかで蔣介石が果した役割を完全に無視している。この点は、民国史の時代区分のなかに一層明確に反映している。すでに述べたように、民国史の第二の時期である北洋軍閥政府の統治と第三の時期である国民党政府の統治との分期は一九二七年にあつた。周知のように、この年は蔣介石による四・一二反共クーデターと武漢政府の崩壊があつた年である。しかし、北洋軍閥の統治の崩壊は通常は一九二八年の国民党による北伐の完成を待たなければならない。したがつて、本書が時代区分の分期点として一九二七年をとつていることは、国民党による北伐の完成よりも、蔣介石の指導下における国民党の反共化を重視していることを意味し、それだけ蔣介石に対する厳しい評価を示しているということができる。したがつて本書は、蔣介石と行動を共にした人々、例えば、陳其美、杜月笙に対しても反革命として厳しく評価しているのである。

軍閥、国民党との対決に加えて、本書の革命対反革命の図式のなかでいま一つ注目すべき点は、マルクス主義の立場に立つた、無政府主義者、改良的社会主義者に対する態度である。その一例をあげれば、儒学者劉師培は一九〇七年突如無政府主義に改宗し、やがて翌年清朝の両江総督端方のスパイとなり、後年袁世凱の帝制を支持するにいたる。辛亥革命直後に改良的社会主義にもとづいて中国社会党を組織した江亢虎は、後年汪精衛の南京傀儡政権に参加する。これらの人々に対する評価は、マルクス主義に対立するイデオロギーに加えて、後年の反革命的立場への移行によつて、極めて厳しいものになつているのである。

中間派的人物に対する本書の態度は、反革命派に対するのとは異なる。この点を蔡元培と鄧演達の例によつて検討してみることとしよう。周知のように、蔡元培は光復会、同盟会の会員であり、五・四運動当時は北京大学の学長であつた。著者の宗志文氏は、「《五四》前後の新旧の思想闘争のなかで、彼（蔡元培）は基本的には新文化を擁護する立場に立つて口語文を提唱し、文語文に反対した。（彼は）科学と民主の新思想を提唱し、封建主義の旧思想、旧礼教に反対した」と述べている。しかし、彼の革命的役割も一九二七年の蔣介石の反共化につれて反革命の側に移行した。つまり蔡元培は、「蔣介石の側に立つて国民党右派に追随し、清党運動に参加し、革命に反対した」のである。満州事変直後彼は、一九三二年に宋慶齢等と中国民権保障同盟を結成し、抗日民族統一戦線に積極的に賛成することによつて革命の戦列に復帰した。すなわち、ここでは蔡元培が中共の主張する革命の側にあつた時期とそうでなかつた時期とによつて選択的に評価されているのである。

鄧演達は、軍人として国民党改組の過程で抬頭し、武漢政府で中共と協力してもつとも急進的な大衆運動路線を追求した国民党左派の指導者であつた。しかし、国共分裂後彼は、一九三〇年に中国国民党臨時行動委員会（第三党）を結成し、反共・反蔣の立場を表明した。著者の傅洪奎、周天度の両氏は、鄧演達の反共的側面についてつぎのように述べている。彼は「共産主義革命は西側の資本主義が比較的発達した国家でのみ起こりうるにすぎず、中国は前期資本主義社会であつて、労働者階級の力は弱く、人口の多い中国農民を指導し、農民の土地問題を解決することはできない、という誤った認識をもつていた。それゆえに、≪中国共産党は中国革命問題を決して解決できない≫などと勝手なことを言つている」と。しかし本書では、鄧の反共よりも反蔣の側面が一層重視される。「鄧演達は終始主要なほこ先を蔣介石の反革命統治に向け、革命をやろうとすればまず反蔣でなければならないと認めていた」。つまり、鄧演達はその一貫した反蔣的姿勢によつて評価されているのである。

以上のいくつかの例を通して異なつた政治的立場の人物に対する評価を検討してきたが、その評価の基準となつていたのは人民＝中共の立場と相容れるかどうかということ、換言すれば革命か反革命かということであつた。その限りにおいて、本書の「前言」で提示された民国史研究の基本方針は貫かれているといえる。このようにその方針は明確であるが、本書の記述それ自体は、「前言」ならびに孫思白氏も述べているように、できるだけ罵倒する表現を避け、着事な事実の解明に基づいているところが多い。これが本書の第二の特徴である。再び尚明軒氏執筆の孫文の例にもどつてみよう。そこでは孫文の著作の原文、『民国日報』等の新聞、あるいは当時の雑誌まで掘りおこされている。また、台湾側の『革命文献』、日本の『犬養毅伝』、アメリカの Marius B. Jansen, *The Japanese and Sun Yat-sen* なども参照されている。このことは、民国史の研究を単なる政治的啓蒙のためだけのものではなく、本格的な政治史研究の一部としてとりあげようとしている今日の中国歴史学界の方向を示しているということができるのである。

最後に、本書でとりあげられている人物の選択について一言記しておきたいと思う。先に例示した政治家以外に、本書に穆藕初、呉蘊初のような資本家、陶行知のような教育家、羅振玉のような学者など多方面の人物が収録されているのは興味深い。しかし、その人選は系統性を欠くといわなくてはならない。例えば、軍閥についてみると、段祺瑞がとりあげられているが、その競争相手である馮国璋がとりあげられていない。国民党についてみても、胡漢民はとりあげられているが、晩年の孫文に関係の深かつた廖仲愷、汪精衛、蔣介石らの指導者は含まれていない。本書は『民国人物伝』の第一巻であり、収録予定一〇〇〇人中六五人を扱つているにすぎない。したがつて、全体の人選については今後本書の完成を待たなければならないであろう。本書には以上の問題があるとしても、中国歴史学界における民国史研究の成果として注目すべきであり、その続刊が期待されるのである。

（一九七八　中華書局刊　四〇八頁）

山田辰雄